

津田昇平教話 第八話

令和三年一月八日 朝の教話

叱って教えてもらうのはありがたいのぞ。叱

られるくらいでなければどうならぬ。

おはようございます。令和三年一月八日をお迎えさせて頂くことができ
ました。

無事に朝を迎えることができるというのは、神様の大変なお恵みの中
で、ほんとに寝ている間も、神様は片時も休むことなく、命を、お守りを
下さって、目覚めることができ、着替えることもできて、歩くことも
できて、そして、お参りさせて頂くことができるということは、やっぱり
それだけ大変なおかげなあとということを、また改めて思わせて頂き
ました。

信心のお稽古けいこを、お参りをさせて頂いたこのお広前ひろまへで稽古をつけて頂

く。氏子うじこの願いねい礼場所れいばしよ、信心の稽古場所として、教祖様に定めて頂いてい
る通りに、お参りをして稽古をつけて頂く。それを、お広前を出て、それ
を持ち帰って、それぞれの生活の中で信心のお稽古はげに励む。それはまあ
言わば、自主学習のようなところがありますね。そしてお稽古をさして
頂いたこと、教えて頂いたことをお手本にしてお稽古をして、そして、
またお参りをさして頂く。そんな中で、信心のお稽古をさして頂いたこと
ろを、お手本を持ってくる。清書を持ってくる。そして、その清書をま
た、手直しさして頂くということなんですね。

信心してお稽古していく中で、時にこう、褒ほめて頂いたり、励まして
頂いたりっていうことがあるわけですけど、そもそも、話を聴いて、神

様に取り次いで下さり、神様からまた、どうすればおかけになるのかと
いうことを、金光大神様に神様が教えて下さり、それをその氏子に分か
る形で、理解できる形で取り次いでいくわけですが、それをこう神様の
ご慈愛、それはすなわち金光大神様のご慈愛になるんですけれども、そ
れをご理解頂いて、お稽古に励む中で、お稽古が進む時はいいんですけど
れども、なかなか進まない。あるいはこう、お稽古をしているけれども
進まないというのは別に、まあこう間違った方向に、我流がりゅうになってき
たりとか。これまでの生き方も含めて、前々ぜんぜんのめぐり合わせで、心得が
違つと。まあ心得が違つと、すべての言動が異なってきましたんでね。

その心得違い、言動の過ちを、お叱り頂くとしかいうことがあるわけです

ね。自分にとっての金光大神様。つまり信心を教えて下さる、み教え下さる、それが自分にとっての金光大神様。神様が一人一人に授けて下さった、教えの親という存在がある。それがまあ、たましいの親になってくるわけですけども。

教えの中で、二代金光様がね、教えて下さっているところでありましたら、「あなたは、教えの親が怖いか」というふうにして尋ねられた方です。ね、「怖うございます」と申し上げたと。そしたら二代金光様は、「結構じゃなあ」と。教えの親が怖いということは、つまりこの方にとつたら、四神様しじん（二代金光様）だったりもするでしょうし、遠くでござい信心され

てる方にとつたらまた、信心の担任がいらっしやるでしょうから、その教会の先生が怖いっていうことになるんでしょう。そしたら、「怖いか」と。「教えの親は怖いか」と尋ねられて、「怖うございます」と申し上げた。そしたら、「結構じゃなあ」と、「うう言って下さったと。

で、「神の思おほめし召めしにかなう」と、次、仰るんですよ。怖いというところがですよ。「結構じゃなあ。神の思し召しにかなう」：怖いって言うてるんですよ。親様が怖いと。教えの親様が怖いと。金光こんこうたいじん大神様が怖いと。「結構じゃなあ。神の思し召しにかなう」と、こう仰る。『二代金光様のご理解』三三八参照)

これはなんでかということになるんですけども、そんな時にこう、四

神様が続いてお話し下さっているのは、「親が怖くないようになったら、筋が切れますのじゃ」。筋、筋ですね。筋が切れる。

「中風ちゆうふうの病人びょうじんが灸しゆをすえて、熱い間は筋が切れていない。すえて、すえて、すえきって、熱くないようになったら、もう筋が切れたのである」お灸をすえて、熱い、あるいは痛いとかもそうかもしかれませんね。感覚はあるということなんでしょう。けれども、熱いとか、痛いとか、リハビリでもそうでしょうね。熱いやら痛いやらというのがあつ間は、これまだ神経しゆじが通とおつてるし、筋が通とおつてるし、生きてるといふことになりますわねえ。ところが、痛いたいといふのが、もうそれすらなくなつた。熱あついといふことも感じなくなつた。痛みも熱さも、何も感じない。まあそ

れこそ、火傷やけどをしてても、針で刺されても、叩たたかれても、何も感じない。こうなったらもう筋が切れてるのである。「熱いなあ。痛いなあ…」というふうなことになるですよ、筋がもう切れてしまってる。これ、もう神経かよが通ってないと。じゃあ神経が通っている方がええんか、通ってない方がええんかって言うたら、当然通ってた方がいいわけですね。

「親が怖い間は結構である」と、重ねて仰せられたんですね。まあ子の立場で普通に考えたら、親に叱しかられるというのは、あんまり嬉しいことじゃないですよ。まあ怖いっちゃあ怖いですよ、子どもにとったらねえ。

じゃあ、怖くないというのはどういふことか言ったら、優しいとか、いつも愛情で見守って下さっているとかいふことなんでしょね。これはこれでもう、すごく大事なことです。見守って頂いてるなあ、祈って頂いてるなあ。受け止めて下さってるなあ。これまあ、いわゆる母性という方ですよ。これは大事なことです。

でも、間違っても、何も言ってもらえない。心得違いがあっても、関心がない、無関心であるってなると、これは話が違いますよね。間違ったものは教えて頂く。正してもらおう。時に道から外れて、周りや、いろいろな方々、自分自身、神様に対してご無礼が重なるようでは、事と次第によったら、そらあ、じつぴどく叱しかられると。これ、人間が成長す

るという上において、ものすごく大切なことになりますね。ま、叱られるんですから、まあ怖いっちゃ怖いし、気分のいいものではないですけどね。これ、教える側にとったら、育てる側にとっても、よしよしするというのが、そんなに難しくはないんですけれど、叱るとか、注意するとか、言動を改めさせるとか、そういうなことっていつのんは、よしよしって母性を表すよりもまあ、十倍も、時にはもう百倍も、ものすごくエネルギーを使うんですよ。

もうどうでもいいやと思って、めんどくさいわと思って、ほっといたらまあ楽なんでしょうけど。その代わりそれ、見捨ててるのと一緒にですから。あれもこれも言っても、理解できなかったり、整理ができなかつ

たりするのがあるにしても、ま、少しずつでもきちんと言葉を教えるべきことを教えていく。これは間違ってる、これは心得が違っているということ、を、気付かせてあげたり、気付くように導いてあげたり。で、場合によつたらはっきりと言ってあげたりということ、すぐ大切なことですね。でも、時間もかかることです。その間、ずっと見といてあげんといかんっちゃあそうやし、なんで分からへんねん！っていうふうにして、腹を立ててる場合でもないです。最初は、もう何でよって思ったとしても、それ、ずーっと持っておくのもしんどいですしねえ。包み込むような愛情もずーっと持ったときながら、その中で、間違っていることはしっかりと教えてあげないと、なかなか伝わらない。受け取る方も、なかなか真

剣に改めようという気持ちになれないっていうことがありますねえ。

見守る母性というものも、人間が成長する上で欠かせないんですけれども、間違ってるかどうかというのを見張られると言いますかね。見張る、そういう父性というもの。場合によったら、すごくこっぴどく叱られてしまう。もっと言ったらもう、そんな子はうちの子じゃないというような感じまで言われるとかね。それだけ聞いたら、すごく冷たいようではあるんですけど、まあもちろん、根本で裏打ちうしろうちされて、ほんととはどんなことがあっても、あなたはうちの子でかわいい子なんやというのがある中で、そうして場合によったら、そんなことしてるようじゃあもうダメですよっていうことを、きつく本人に気付かせるための言動って

うのは、親の方も、育てる方も、当然出てくるわけですね。

そうする中で子どもは、快か不快かと言ったら、褒められて受け止めてもらったら心地よいでしょうし、叱られたり、注意されたり、おしりパチンとか、手えパチンとかってされたら、そらまあ不快でしょうね。

そやけど、快か不快かという部分がないと、理屈だけじゃなくって感覚的に、これはいいんやなあ、悪いんやなあというのを学ぶしかないんですよね、人間っていうのはねえ。ま、人間だけでもないんですけど。

そういったところを教えて頂けるといふのは、自分が正しい道、何が正しいかっていうのは、天地の道理てんち どうりに沿ってるのか、神様の御心みこころに沿ってるのか。神様がお示しくださっている、人として生きていく道とい

うのがありますね。それを神の道と仰ったり。神の道ってのは、天地の道になってきますね。

てんちかねのかみ
天地金乃神様、天地が神様のお体ですから、この天の理、ことわり地の理。ま
とめて天地の理。神様の御心、みこころそこに沿って生きるということをお教
え頂かないと、どんなに一生懸命生きてても、幸せにはなれない。立ち行
かない、おかげにならない、ということなる。

おやがみ
おかげにならないと本人も苦しいし、子が苦しんでいる、それを見て
おやがみ
親神様も苦しむ。親神様も氏子も苦しんでいる様子を見て、教えの親様、
たましいの親様もそれでまた苦しむということになる。みんなが苦しむ
ということになる。

そう思うと、間違っただことは間違ってる、違うものは違うというものを教えて頂く。場合によったら、参ってくる人にとったら、もう〇歳から参ってくると言うよりも、まあどこかで話を聞こうと思ったら、育てられた家庭の中で、家の中でね、前々のめくりせんぜんというものがある。間違ったり、心得違があったりというのがあある。そういう時間をかけて十年、二十年、三十年、四十年という時間をかけて、自分の心得違いというもの、知らず知らずに出来上がってくると、これ、直そうと思ったら、大変な時間がかかりますねえ。まっさらな状態から育ててもらおうということじゃなくて、大概たいがいに歪みゆがみがある中で、それを歪みとすら感じずに生きてきた。そう思うと、そこを根っこから気付かして、改まるように教え、

教えて、それが手間暇てまひまかけて、ほんとお稽古けしこして、成り立っていく。道がついてく。これ、すごい時間がかかることですねえ。ええ、十年、二十年いう単位になるかもしれません。本人のお稽古も大事やし、神様はそ
の間、ずーっとおかげを授けて下さる。失敗しゆうするから、お赦ゆるし下さる。
これ神様もそうだし、でも実際には、それを表立って神様の思おほし召めしを受
けて、氏子が助かるために、辛抱強く愛情を注ぎながらも、叱咤しつたげ激励きれいして
いく、教え導みちいていくというのは、教えの親様になる。だからすごく、親
様になるんですよ。まあすごく手間暇てまひまもかかるし、でも、愛情がないと
それもできないし、かわいいかわいいでいいかんし、叱り叱りでもいか
んし、どっちもやっぱり大事で、父性も母性も両方あって、人間って

うのは育てていく。正しく導いて頂くことができるわけですね。でない
と、水をやりすぎても根を腐らせるし、あげんかっても、厳しく、あげな
いあげないなっても、枯れてしまう。水浸しになるんか、それともカラ
ツカラになるんか。どっちにしたって結果としては、根が腐ったり、枯
れてしまって、で、もう命が絶えるということになるわけですよ。そ
ないならんように、細心の注意を払いながら、親なりに一生懸命子育て
をしていく。〇歳からの時もあれば、二十歳、四十歳、五十歳、時には年
取ってから、老人になってからでもお参りをして、そこから、育て直し
のおかげを頂くということもあるわけですね。でも、叱って頂くとい
うことがあってこそ、助かりがあって、過ちをお気付け頂くっていうこ

とは、ほんとにありがたいことやなあと思いますねえ。

あまぎ
甘木の初代、甘木教会っていうんね、あの福岡県の教会の初代だったかな、お弟子さんの方に対しても、厳しくお叱しかりになられることがあった。でも、弟子たちのことについて、弟子は師匠うしやに叱しかってもらって、そうしてめぐりを取って頂くんたということを抑おさましてくれど、これは確かにそういうところありますねえ。叱しかって頂くいうのは、ほんとに、なかなかエネルギーがいるもんですけれども、ほんとにこう手塩てしおにかけて教えようと思ったら、すごく時間かかることがありますね。

でも言っても、本人も分かっているけども、なかなかできないって

うことも、私たちもあるんじゃないですか。こうせんといかんねんけど、ああせんといかんねんけど、分かってるけどなかなかできん、ということあります。これが難しいんですね。本人が何もしていないとか、変える気がないというわけじゃない。分かっているけどなかなか簡単じゃない。分かっても、どうしていいか分からん。改まり方が分からんということもあります。でもそれも、教えて頂いて、あるいは、気付くのを待って頂いて、で、お稽古けいこをして、三年、五年、十年経って、だんだんとほんとに自分の身に体たいしていくことができる。腹に食い込んで、事に当たって、できるようになっていく。そこに初めて本当の意味のおかげが頂ける。本当の意味で、難儀なんぎの根っこ、めぐりを取って頂くいうことがで

みるんですね。

もう一つ、教祖様のご理解というものでお話をさしてもらったら、あ
る人が、

信心しながら次へ次へ不幸せが重なると、「なんぞの所為しよゐ
(しわざ)ではないでしょうか。なんぞの罰ばちではないで
しょうか」と言うて参る者があるが、どうして、神様がか
わいい氏子うじこに罰をお当てなさろうぞ。

〔理Ⅲ 尋求じんきゅう教語録 二より抜粹〕

どうして神様が、かわいい氏子に対して罰を与えるようなことをせん
といかんのや。そんなはずがないやろう、と。お参りする人は信心をさ
してもらってなのに、次々不幸せなこと、まあ難儀なんぎなことが重なってく
る。なんででしょうか。なんかこう、罰が当たったんでしょうか。何か崇ただ
りでもあるんでしょうか、とかね。そんなことを、まあつい考えてしま
うんでしょう。でもそんな方に対して教祖様は、「どうして神様が、こん
なかわいい氏子に対して罰をお当てになるであらうか。そんなことする
はずがないやろう」と。それは、

「心得が違ちがうておるぞ。気をつけい」とお気づけがあるのじゃから、今までとは心を改めてご信心をすれば、不幸せがおかげになってくる。

【同】

心得が違ちがうておるぞ。氣いつけえよと、神様が教えて下さってるんや。信心してても、不幸せなことが次々起こってしまう。何のことやろうかとか。罰を当ててるんでしょうか。いやいや、そんなことするはずがなかろうと。神様かわいだけなんや。心得が違ちがうてる。心得ですね。心なんです。心得が違ちがってたら、すべての言動が変わってきますから。心

得が正しかったら、これも変わってくるでしょうね。おんなじ人間でも、心得が違う時、よって何を言うのか、何を思うのか。何を考えるのか。何を聞くのか。聞き方、見方、感じ方、全部違ってくる。だからそれに呼応して、何をどう行動するのか。全部変わってきますでしょう。だから、心得というのは根本なんです。性根しやうねという所で、ま、性根と言ったら、もう一つ深い所になりますでしょうけれど。こうやってお気付け頂くで、今までとは心を改めて信心をすれば、ご信心すれば、不幸せがおかげになってくる。

叱しかって教えてもらうのはありがたいのぞ。叱られるくら

いでなければどうならぬ。

【同】

どうにもならん。叱られるといふことがなくなったら、これもう、どうしようもないやないか。

「あんな者はしかたがない。どうになりとなれい」と思えば、人間でも叱りはすまいが。

【同】

あんな者はしかたがない。もうあいつはどうしようもないわ。もう知らん。もうどないでもなってくれ、もう知らんでわしは…って思ったら、もう人間ではそこまで行ったら、もう叱ることすらしない、と。まあそうですわね。叱るといのは、愛情があつてのことですから。もう叱ることすら、もうええわ、もうどうでもいいわ。あいつのことなんてってなったら、もうそれまでなんですよ。自分のかわいい子が、まあ言ったら、道でねえ、一緒に歩いて道草で、しっちゃあいかんようなこと、悪いこと、嫌なことをしたら、「あんだ何してんの」「って言いますけど、全然知らない人がしてたら、そら赤の他人に「やめなさいよ」「なんて言うのは、言うことがないとは言いませんけど、まあ少々のことくらいやったら、

もう道に唾つばを吐いたりとかね、ごみをポイポイ捨てたら、自分の子がしたら、「いや、なんてことをすんの」と言っても、他人様がどっかでしててもそらあ、「はああ…もう、何をしてはんのやろうか」まあ近くやったら、自分が代わりになんかしてってあるかもしれないけど、まあそうもできるような雰ふん囲い気きのお方でもない、それこそちょっと顔に傷が付いてるようなね、小指がないような方とかでしたら、とてもじゃないけど言えないってことはあるでしょう。そうなってきたら、もうほったらかしですわ。まあ言いようがないですもんねえ。おっかないと思うでしょう。

「あんな者はしかたがない。どうになりとなれい」と思えば、人間でも叱りはすまいが。「どうぞ、あれが」と、
ためを思うからこそ叱りもするのであるうが。

【同】

「どうぞ、あれが」あれが、というのは、どうぞあの子が立ち行きますように。どうぞあの子がお育て頂きますように。どうぞあの子が改まらなくてもいい、お育て頂いて、どうぞよい子になりますように。正しい道歩めますように。まっとうに生きれますように、ということですね。どうか、どうかあれがと、ためを思うからこそ叱りもするのであるうが。

まあそうですね。そう、ほんとにそうですね。

これは教祖様のご理解ですけれども、「こじでも」「叱しかって教えてもらうのは、ありがたいのぞ」といふふうにして、「ご理解下さってますけれど、ほんとに、叱しかって頂くといいのは、ま、当たり前ですけどあんまりいい気はしない。叱しかられる側でしたら、全然いい気はしないですよええ。もうブスツとしたくもなるし、時には反抗して、イラっとするかもしれないし。でもまあ、こじやって叱しかって頂へ。間違いをね、指摘して頂へ。それを時にはビシツと言われるっていいのは、やっぱり怖いですね。

基本的に、例えば三つ子の子にとったら、親っていいのは絶対的な存在になりますからねえ。そうすると、それこそほっとかれたり、捨てら

れたら、生きていけないんですから。そう思ったら、ほんとうに縋り付くしかない。でもその親に、愛情があって、かわいいと思って下さっているとはいえ、時に自分が間違ったら、ビシツと言われる、って言ったら、そら怖いでしょうね。

だから教えて頂く「教えの親」って、四神様しじんは仰います。「あなたは教えの親が怖いか。結構じゃなあ。怖いんやったら結構。神様の、神の思おほし召めしにかなう。もう怖くないようになったら、こらもう大変やで。危険やで」って。親が怖い間は、それは結構なことや、と。

怖くなくなったら、どないなるか言うたら、もう傍若無人ほうじやくにんなんですよ。ね。もう好き勝手になりますから。それでいながら、自分はまっとうに

生きていると思っとるんです。これ、めぐりを積んどるんです。うかうかとめぐりを積んでる。まあそういう人がいないとは限りません。お参りするようになって、信心してても、偉そうにしてねえ、だんだんと自分が何様かよう分からんようになってる人がいますよ。そないならんようにと思いますね。

で、そこまで来たらもう神様も、「もうほっとけ」って言われます。私もそういう人は、神様がほっとけて言われたら、もうほっときます。で、それでどこまで落ちるか、そら本人次第でしょうね。聞く耳がないんやったら、もうしょうがないですよ、それもねえ。ま、行くところまで行ってもらったら、それで命落したり、そら知りません。本人が自分で

神様を捨てたんやからしょうがないですわねえ、それねえ。「いや、私は神様捨ててません」言うたかて、そんな自分の好き勝手な神様拝んどつても、意味ないですもん、それ。参ってくる意味もないし、教えを聞かしてもらう意味もないですもんね。まあおられますよ。ま、そないならんように。しっかりと、ほんとに謙虚けんこゝろな謙虚な心で、なにを偉そうにしてるんか知らんけれど、そんなにあんたが偉いんかと思うことがありますもんね。いますよ。ま、そないならんようにね。みっともない生き方にならんように。

神様のご信心さして頂いてるんやったら、やっぱり謙虚な心で、教えを頂かしてもらおう。そういう心じゃないと、もう参ってる意味もないで

すもん、それねえ。何しに参って来てるんやになる。あんたの広前ひろまへでも何でもない。ここは神様のお広前であり、私がお預かりしている、私のお広前で。お許し頂いて参らして頂き、「教えを請こわしてください。教えて下さい」って、頭を下げて、そして教えて頂く。

これ、教祖様んどこ行っても一緒でしょう。まあ元々それがスタートなんですから。お許し頂いて、教祖様の自宅をお広前として開放してもらって、そこに参らしてもろうとるんですもんね。そこで偉そうにしたら、そらお参り禁止されてもしようがないですわ、そんなんね。まあ禁止にされんでも、お気付け頂くのを待って下さることもあるでしょうね。教祖様もたくさんのご辛抱をされて、そしてそんな中でも、一人、二人

とまた信心してね。ほんとの信心しておかげになっていかれた方が、後々のちのちたくさんの方に、道を伝えて下さったんやなあと思います。

お取次とりつぎを頂くということは、ほんと根本的には、お優しく、自分が助かり、幸せになるために教えて下さりますから、ほんとにありがたい。愛情がなかったらもう、成り立たないですよねえ。赤の他人にだいたいねえ、自分の身の上のことを聴いてくれはったりとか、自分のためを思うて丁寧ていねいに話を聞かして下さったり。失敗ばかりするのに、三年も、五年も、十年も、二十年も付き合って頂くなんてないですよ、こんなね。実の親でも、まあそんなんやってくれないん違いますか。

それを教えの親様に、別にねえ、お供えするんやったら、お金払って
るのに言うて、そんなん違いますでしょう。私ら一円も受け取ることな
いですよ。ま、言うたら無料でやってるんですもんねえ。善意だけでや
ってるんですもん。おかげ頂いて、神様、そら神様にお供えするのは結
構ですけど、こちらが受け取る筋合いもありませんからねえ、一円もね。
でも受け取ったら、もう契約になりますから、そういう立場を教えるっ
てことはできませんのんで、一円も受け取るっていうことは、私はしま
せん。神様が全て、お礼でも、お詫びでも、お願いでも、みな神様にお供
えさしてもらいます。私が受け取るものなんて、一度もないですわ。宅祭^{たくさい}
でも、どこへ行っても、そらお礼頂いても、「御礼」って書いてても、そ

んなん一円もこれまで頂いたことはないです。みな神様に。だって私が受け取る筋合いはありませんもんね。あくまでも、まあ氏子としては、そんな書いてても、こちらは受け取る気はないですから、ゼーンぶ神様ですよ。当然のことですね。まあ「ありがとうございます」の心だけは頂かしてもらおうとしても、あとはもう、みーんな神様に全部持って行ってもらったらそれでいいんです。そう思ったら、そういう中でも、無料で教えて頂く、無料で聞かして頂けるって、これ月謝払ってっていうんじゃないんですもんねえ。ほんとにもう、ただただ、ただただ時間を、ほんとにもう三百六十五日、朝から晩まで、お広前用意して頂いて、ほんで話を聴いて頂いて、時にもうドドドドした話からねえ。ドドドドし

ひな

た話聴いたら、そら皆、疲れると思いますよ。それでも受け止めて下さって、一緒に祈って下さって、ほんでまた教えて下さって、そんなこねえ、世の中どこ探してもないんですよ、これねえ。ほんとにないですよ。そう思ったら、ほんとにこうやって、こういう場があるっていうのは、ほんまにねえ、有あり難がたいですよ。当たり前にならんようにせんといかなあと思います。

まあ、今日は今日で、こうして信心のお稽古けいこをさして頂きますけれども、お取次とりつぎを頂くことができるということが、ほんまにありがたいことなんやで、ということを二代金光様が教えて下さっています。そのありが

たさは、ただ優しくして下さいだけが、ありがたいんじゃないんやで。
時に怖いと思うくらい、ああ怖いなあ、親様怖いなあ、先生怖いなあと
思うくらいに、お叱りしか頂き、これもほんまありがたいんやで。かわいい
と思ってるからこそ、言うて下さってるんやでと、教祖様仰って下さ
ってますけど、ま、それを、神様の思おほし召めしを体現たいげんして下さい、教えの親
様、金光大神様の存在こんこうだいじんってというのは、やっぱりありがたいなあ、と。

だから神様に対しても、金光大神様に対しても、お礼を申し上げる。

だからこそお祭りだあってあるんですよ。生神いきがみ金光大神様、金光大神様

の月例祭げつれいさいっていうのも、もちろんあるし、天地金乃神様の月例祭もある

し、どちらも必要。どちらか一方なくなったら、もうそれで信心できな

いでもん。もう無理ですよ。まあ、子どもでも、親がない状態ただ生きるってなったら無理ですよ。言葉もしゃべれんしねえ。人間として、人間らしく生きれるかどうかだって怪あやしい。そもそも生きていくとすらできないでしょう。それと同じようなもんで、やっぱり親がいて、いろんなこと、正しい道、神様の道を教えてあげるっていうのは、ほんとに恵まれたことやと思います。

ま、その恵まれたところをお互いに、それを頂いて、ここまで信心生活こしんえんさせて頂いておりますから、御神縁ごしんえんを頂いていることをようお礼申し上げますながら、今日も一日、そのおかげの中で、信心のお稽古けいこを励はげまして頂きたいなあと思います。よくお参りでした。

3)



津田昇平教話 第八話

令和三年一月八日 朝の教話

令和四年一月十六日 初版発行

発行所 金光教尼崎教会

〒六六〇―〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三―七―五
